

---

## かわとはきものギャラリー展示・収蔵品の紹介

### 1. 世界のはきもの

都立皮革技術センター台東支所

---

東京都立皮革技術センター台東支所は、東京都の伝統的地場産業である皮革・はきもの関連産業の振興のため、試験、研究、技術支援・相談そして情報の提供などを行っている。これらの事業のうち、情報提供事業の一環として、かわとはきものギャラリーでは、靴・はきものを中心とした製品の展示、国内外の技術文献等の収集や提供をしている。

これまでこの「かわとはきもの」の誌面において展示品の紹介をしているが、改めて今号から数回にわたってギャラリーの展示・収蔵品を紹介する。

なお、今回の展示・収蔵品の説明にあたっては、巻頭の「靴の歴史散歩」を連載されている稲川實氏が、この連載を開始する以前の昭和55年12月から約6年間「世界のはきものあれこれ」と題して執筆された内容をもとに紹介する。

#### 展示中の主なはきもの



遊牧民の靴（ウズベキスタン共和国）

ウズベキスタン共和国は、紀元前から東西文明の交流で有名なシルクロードの通過地点として知られる国である。この靴は、展示品の中でも他を圧する重量感と風格を持っている。材料は山羊革で、甲は2～3枚の貼り合わせで作られており、中敷として分厚いフェルトが入っている（いずれも防寒のためと思われる。）。底造りでは、甲革と同じ厚さの革を30枚以上も貼り合わせであり、特に高い踵部分は50枚程度はある。また、底面には火造りの鋸が打たれている。



李王朝時代の男性用木沓（韓国）

韓国では、この木沓を「ナマキン」と呼ぶそうで、オランダの「サボ」と日本の「足駄」をミックスしたような形をしている。日本の下駄のようなもので、庶民のはきものであった。



纏足の刺繍靴（中国清代）

纏足とは、女性の足を幼年期から布で巻きつけ、発育を止めて大きくならないようにした古い時代の中国の習わしで、女性の一生をかけて造り上げられたものである。それだけに履く靴は、細かい細工を施し、贅を極めたものになっている。

刺繍の模様は、つま先に蝶を描き、側面にジャスミンの模様を入れるのが代表的図柄であったといわれ、写真の靴（12cm）は若い女性の室内履きではなかったかと推定される。



ソコトサンダル（ナイジェリア）

ナイジェリアは、有名なサハラ砂漠と大西洋にはさまれた国である。このサンダルの購入地は、サハラ砂漠に最も近いソコトという町である。

最大幅が26cm、長さが31cmと大きく、まるで飾り物のようである。底面が毛付きで、コバを斜めにスキ落としてあること等などの特徴やその大きさから、砂地での歩行に適しているものと思われる。



サボ・木靴（オランダ）

サボは、女性・子供用のものは、赤を主体に彩色が施され、美しく可愛いはきものにつくられている。

この男性用のサボは、木地仕上げでいかにも農作業用といった作りである。



毛糸玉のついた靴（ギリシャ）

資料室開設（昭和47年）後の間もない時期に、都内百貨店で開催された「ギリシャ展」で取得したもので、底革のフチを整型し、お盆のフチのように甲を包み込む仕立てになっている。甲の材質が革であることと毛糸玉の飾りが特徴的で、民族舞踏には欠かせない靴である。

#### 参考文献

- ・稲川實 世界のはきものあれこれ、かわとはきものNo.34（昭和55年12月）P16, 17, No.35（昭和56年3月）P17, No.37（昭和56年9月）P18, No.40（昭和57年6月）P21,22